

---

# さよならをいうとき

社 九生

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

さよならをいうとき

### 【Zコード】

N7541R

### 【作者名】

社 九生

### 【あらすじ】

楽しかった時間、切なかつた時間、そんな全てを、いま、あなた  
の前によみがえらせます

アステロ・ワークス社

この思い出たちから歩き去らなければいけないのは、よく分かっていた。

学校からの帰り道。

夕暮れの生温かいような、一抹の切なさを含んだ空氣と、橋の下を流れる川。

水面には線香花火みたいに光が踊っていて、東と西で二つの時間が流れている空が、どこまでも広がって見えた。

僕は当然のようにその景色のなかにいる。気の知れた友達三人と、夕暮れの琥珀色を感じながらくだらない話をしている。

彼らとはいつから、連絡が取れていないのである。

浪人生になってしまった僕が、誰一人仲のいい友人を作ることが出来なかつた予備校に入つてからか。大学に合格して、両親やら世間の目やらに監視されながら就職というゴールを目指し始めた頃からか。

よく、覚えていない。

卒業式の日に、三ヶ月に一度は会おうつて約束をしたことだけは、いまでも鮮明に覚えているのに。

駅の改札口で。四人で手を挙げて。

いま思えば、あの「さよなら」から、僕たちはそれぞれの列車に乗り込んで行つたのだと思う。

浪人が確定していた僕からすれば、あのときの終着駅は間違いなく大学合格だつた。

でも、いざ合格発表を目の前にしてみると、また新たな線路がすうつと僕の前に伸びていつた。

次の駅は毎日学校へ行くことで、単位を落とさないことで、人間性のよく分からぬ人たちと義務的にはしゃぐことで、この環状線を三回巡り、次の駅は就職活動。僕の場合はすんなり決まった。周

りの人たちと比べて高望みしなかつたのがよかつたのかもしれない。

そして、いま。

社会人一年目を迎える僕は、「こんな独り身の中年男が熱中するような奇妙な仕掛けの虜になりつつある。

メモリアルウム 記憶のプラネタリウムと銘打たれたこの装置は、文字通り頭のなかにある思い出を映像化してくれる「アステロ・ワークス社」の商品だ。

本社はアメリカにあるらしく、僕はネット広告でこのサービスの存在を知った。

最初は気にも留めなかつた。会社の書類をまとめる資料探しでそれどころではなかつたからだ。でも……僕という人間が、そもそも能力のある人間ではなかつたからかもしれない。

いつからか仕事がうまくいかなくなり、無性にやるせなくなつて、そのときに再び、このネット広告に出逢つた。次の日がたまたま休みだつた。やらなければならぬ仕事がいくつかあつたけれど、それから逃避したい気持ちもあつて、僕は電車を二つ乗り継いでアステロ・ワークス社の日本支部がある雑居ビルへと赴いた。

そこは小ぎれいな歯科クリニックのような場所で、白衣を着たドクターがあり、精神科で行われるような問診（実際に行つたことはないから、あくまでイメージだ）を受け、次回は映像化したい期間の象徴的な物をいくつか持つてくるように言われた。これも記憶の映像化には必要な手続きらしかつた。

そして二回目、僕は高校の卒業アルバムと、捨てずに取つておいた制服、軽音楽部に所属していた頃に使つていたギターを持って、クリニックを訪れた。

「制服を着てギターを構えてください。過去に対する念をより強めるためです」

そう力強い口調で言つ医師の言葉を聞いたときには、さすがに新興宗教めいた怪しい空氣を感じずにはいられなかつた。

だけど、僕はどうしようもなく疲れていた。騙されていると頭の片隅で感じていながら不思議と抵抗できない心理状態にあった。

医師に脳波を調べるための装置みたいなのを頭にはめられ、「きれいな思い出がよみがえっていきます……」という言葉を聞きながら、僕は深い眠りへと落ちていった。

目覚めたあの記憶はぼんやりとしている。ただ、僕はクリニックへ持っていた物にもう一つ、映像化した記憶のディスクとそれを読み込むプラネタリウム型の投影機を両手いっぱいに抱えて家路についた。

独り暮らしの部屋は物が少なくて、四方を囲む壁の白さがいやに際立つて見える。

疲労からほとんどの手足が勝手に動くロボットのよつだつた僕は、それこそ淡然と部屋の明かりを消して、説明書きに沿つて装置をセツトした。

プラネタリウムから光が射し、無地の壁に『CAUTION!』と警告文が映し出された。

『本装置ではあなたの思い出はよみがえっても、あなたの時間まではよみがえりません』

これも訴訟大国アメリカならではの前置きなのだろうか。それから数秒のブランクののち、映像が始まると、僕はすぐにこのにめり込んでいつてしまつた。

何故なら、この映像のなかには、毎日わけの分からぬことで怒鳴りつけてくる上司も、僕をぐんぐんと追い抜いていく同僚の姿もないからだ。

廊下を駆けていく足音、休み時間のざわめき、始業のチャイム、授業中の氣だるい静寂と、誰かのひそひそ声。

何気ない音の一つ一つが僕を優しく包み込んで、これから十四時間後には通勤電車に乗らなくちゃいけないことなんてすっかり忘れていた。

入学式のあと、これから三年間を共にするクラスメートとの顔合わせ。教室は緊張の空気で占められていた。

「ああ、僕はあんな言葉がきっかけで、彼と友達になつたんだ。

憧れていただけのギタリストへの道も、仲良くなれるとは思つていなかつたやつとの最初の言葉も、毎日乗りこなせるか不安だらけだつた朝の満員電車も、一人で帰ることになるだろうと勝手に決め付けていた帰り道も、全部、奇跡のようなきっかけがあつて、まったく、僕というやつは夢のような時間を過ごしていた。

心残りはあまりない。

やりたいことはほとんど出来たし、本当に幸せ過ぎるぐらいに順調だった。

だけど、思い出は終わつてしまつ。卒業式の帰り、駅の改札を最後に。

僕は慌てて付属のリモコンを握りしめ、また入学式の日から、あの三年間を再生していった。

『本装置ではあなたの思い出はよみがえつても、あなたの時間まではよみがえりません』

そんなことは分かつてゐるんだ。分かつてゐるんだよ。

でも、僕は何度も思い出をさかのぼり、そして延々とそれを繰り返した。

外はもう深い夜の気配が薄れ、朝靄が漂い始めている。

結局のところ、僕は寝るのも忘れて思い出観賞に没頭していたわけだ。

こんな人間が日本でも少數、本土ならもう何千、何万人かいふことを想うと、アステロ・ワークス社はなかなか罪深い代物を作つてしまつた。

僕はいよいよ現実に歸れない。それこそ、思い出と鎖でつながってしまったみたいに。

「最近元気ないけど、どうかしたの？」

映像のなかの僕が、一人の友人にそう声をかけている。

場所はあの帰り道。夕暮れ、橋、川の流れ、車、人々の往来。僕らの風景だ。

「うーん、なんていうか」

友人の声には苦しくうめくような響きがあった。

卒業を一週間前に控えていた頃だ。帰り道には、僕と友人しかいない。

「こうやって話すのも、ここを通るのも、あと少しで終わりなんだなー、って思うとね」

「センチメンタル?」

友人は力なく笑つた。

「つーか、おまえ」

あまり気落ちしている自分を見られたくないのか、彼は急に話頭を転じた。

「結局さあ……この三年間で、好きな子とか出来なかつたのか?」

「可愛い子いないじゃん。それにさ、ぶっちゃけ、部活やつてたり、男とぐだぐだ喋つてたりしてるとか、俺的には楽しいんだよね」

「……ホモ?」

「ばれたか」

そして友人の尻に手を伸ばす僕。当然、くだらない芝居の一つだ。でも、それが楽しかつた。

結局、友人の誰に聞かれても濁すばかりでまともに答えなかつたけど、本当は、気になつてゐる子がいた。

でも、一方で、僕が友人に言つた言葉も間違いではなかつた。

毎日部活に行つて馬鹿みたいにギターの練習をしたり、誰かのうまくいった、いかないの恋愛話を茶化したりするのも乐しかつた。

彼女とは一年生のとき、女子グループが中心になつて企画した『クラス交流会』で携帯電話のアドレスを交換したつきり（それも流れで、だ）ろくに会話していない。

彼女は今ごろ、どうしているのだろう。大学を卒業して新米O-L

として働いているのか、あるいは素敵な旦那さんが出来ているのか  
もしれない。

いずれにしろ、僕が好きだったあの子は、もうこの世にはいない  
のだろう。

この友人だつて……。

「おい、柏崎」

僕は友人の名を呼んでいた。あの駅の改札口で。

「卒業したつてさ、会おうと思えば会えるじゃん。だつて、」

俺たち、友達だろ？ 僕はそう言おうとしたけれど、急に照れく  
さくなつてやめたんだ。

「……いつか、酒を呑みに行こうぜ」

友人は微笑んだ顔でうなづいて、その背中は僕とは違う路線に向  
かい、遠く、消えていった。

とっくに酒を呑める年になつてからもう何年、僕たちは結局、会  
おうとするらしていない。

いまの僕の右手には、メモリアルウムのリモコンではなく、携帯  
電話が握られている。

高校時代から一回機種を変更したけど、電話帳は引き継いだから  
友人たちのメールアドレスは登録されたままだ。

届くかどうかは分からない。ただ、僕は一心不乱に文章を綴り、  
卒業式の日に駅の改札で別れた友人たちにメールを送った。  
時刻は六時。寝てもいいのに目覚まし時計は鳴る。それを止め  
て、僕はいそいそと出社の支度にかかりた。

アドレスが変わつていて、メールが届かない。そんな通知を知り  
たくないで、僕はメールを送つたあと、ほとんど無意識のうちに携  
帯電話を閉じた。

『本装置ではあなたの思い出はよみがえつても、あなたの時間まで  
はよみがえりません』

なら、いまの僕に出来ること。

それはいつか、あの友人たちと再会した時に、恥ずかしくないよ

う、精いっぱい。

明日を、生きていくこと。

(後書き)

3月19日。筆者は無事高校を卒業することができました。今作はその記念に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7541r/>

---

さよならをいうとき

2011年3月20日08時40分発行